

自閉症者はそのこと自体で「処遇困難者」であろうはずがない。他害・破壊行為・彷徨・自傷等の問題行動が、しかも多くは不意打ち的に現出することが処遇＝支援を困難にしている。

上記の問題行動がなければ自閉症者もまた、他の知的障害の人達と同様に、社会性を持って仲間とともに生活を営むことが出来ることは申すまでもない。勿論本人にとっての自閉症固有の生きにくさについては応分の配慮が必要となることは当然であるが、そのような条件整備によってその他の障害の人達と大差ない人生は可能となるのである。

ここに自閉症にして強度行動障害を伴う人達の存在が「処遇困難者」として自他を悩ましている。上記したようにその問題行動の発現は突発的であることが多く、その影響を自他に及ぼさないために覚醒時はほぼ常時、行動の注視観察と問題行動時の制止が必要となり、いわゆる「マンツーマン対応」が多くの場合求められることとなる。そしてある人達にとってはその「マンツーマン対応」は当事者にとって必要で適切な支援と認識され、これが解消されるべき課題とか克服されるべき課題とは考えられていない。

しかし「これはこの子の特性に応じた当然の支援形態」という主張が受け入れられるのは、多くの場合養護学校在学中に限られ、就学期間を終えるやその支援は「障害者総合支援法」という法制下の中での選択にならざるを得ないのである。すると養護学校等で当然のように提供されていた「マンツーマン対応」という支援形態を求める保護者の思いはたちまちに困難に直面することになるのである。曰く「マンツーマン対応なんて制度的＝人件費的に無理だし、一人の人間が貼り付きで支援することもやり切れない」というのが殆どの施設の反応になろう。またたとえ受け入れてくれる入所施設があったにせよ、そこでもほとんどは集団の支援が行われているから、やはりそこでも「独りでいられない」「仲間の中にいられない」ことが問題となることは他の施設と同様である。処遇に困ればそこでも隔離措置が不可避となろう。

つまるところ問題の根幹は「マンツーマン対応以外落ち着いていられない」という特異な存在の仕方にこそあるのである。何が「特異な存在の仕方」なのか。そしてこの存在の仕方にアプローチし、これを解決（＝治療・矯正）する方法はどこに存在するか。我々はこの原因を「母子未分離状態の遷延」と捉え、この背景と解決への途を考究して来たが、この論考はその課題に対する一考である。

1 快感原則

人は放置すれば快感原則に従う 「快感」とは五感（身体感覚・触覚、味覚、聴覚、視覚、嗅覚）の快感である この身体の快感が心にも安堵と快感を及ぼす この時の人間存在は縮退・停滞・現状留保に向かっている それは性（行為）であり、別の言い方をすればその極限は死である 性があり死があることは生命としての自然性である（生⇔死の循環。これを無限に繰り返すために「性」という次世代の生産行為がある） 従って「子育て」という行動が伴わないだけ虫達より哺乳類よりも自然性として自然である しかし自然そのものの虫達よりも、子育てをすることで哺乳類の世界は一層構成的でありそれゆえ高度であり一個の生命の生成消滅のドラマとして深い世界である

いま未開の人間を想定して、彼が快感原則に従うだけの人生を送るなら世界を広げて行く必要を覚え、狭隘な生存域は固定したままである。しかしもし彼が困難をいとわず山野を跋涉し、目の前に山に登れば別世界を見ることになるだろう。これは彼の世界の拡張であり彼の物語の複雑化であり、総じて彼の生き方の高度化と豊饒化である。すなわち、快感原則への不服従、もしくは快感原則の統御こそが外的にも内的にも人間的世界の拡張と豊饒化への第一歩である。

C.Y.の場合に適用すれば、プリミティブな彼の快感原則は以下の特徴を持つ。

- ・出来れば起きている時は絶え間なく、一対一の対応を望む
- ・継続的な身体的接触（特に異性による）を望む

これらの欲求が満たされることは即ち本人世界の狭窄化（の固定）であり、従って本人世界の拡張や豊饒化を望むことはできない。

この状況は何にアナロジーできるか。それは唯一乳幼児の母子合体に比定できる。「母子未分離のま

までずっとあり続けたい」。なぜならそこでは自己の快感原則が第一義に満たされる状況だから。幼児にとってこの「母子一体化」の状態から切り離されることは苦痛なのである。しかし乳離れは幼児の成長にとって不可避であり不可欠なプロセス。

あらゆる人間の事象（行動・心理等）は必ず人類史的に、または個体の生育歴の中に起源を持つだから異様に見える「一対一」の関係も人間が必ず潜ってきた体験にその淵源があるそれは出生から乳離れの中の母子関係であり、例外なしに人間はこの関係を通過体験している<理解困難な事象に出会った時「何と比較できるか」という発想によって道を拓く>

2、生物の存在する理由とは

個体はただ種を次世代に引き継ぐためにのみ生存する

人間はいかに高度に進化を遂げたにせよ、この生物の根源的要素を逃れることは出来ない

人間もまた次世代に種をバトンタッチするために、誕生し生存し死を迎える

これは遺伝子の伝達・継続という側面を持つ

母（雌）はただ眼前の一子のための母（雌）ではなく、養育期間を終えたら次の妊娠に向かう存在

※6で詳述

3、個と種との矛盾的な関係

個体は種の命題に従うのであるが、しかし個体としての利益（存在理由）をも追求する

生命は「性の相」と「食の相」の二面を持つが、この「食の相」において個体としての利益を確保しようとする

一本の木は個体としての満足な成育条件があれば、ただ自らの体を大きくさせる。しかし個体存続の危機（水不足とか）に直面すると花を咲かせ実を結び子孫を残そうとする。野菜の徒長。

種の命題に反して個の欲求を通そうとする場合が生じる

※1の「個の快感原則」

4、個体生存は快感原則に従おうとする（1を参照）

個体は自らの生存に適した環境条件を求める

これを人間（動物全般も）に当てはめれば、自らが心地良いと体感できる環境条件を求める・求め続ける（従って「性・性行為」は個体の求める快感原則と種の存続との接続点としてある）

性＝種と個体が交差するポイント

5、母子分離とは何か ⇒人間は母子一体の状態を万人が通過する！

「人間の生誕は12カ月の早産」と言われるように、特異な出生

栄養摂取と体温維持（それがなければ外気に対して36度の体温を保てない）のために母親に密接することは不可避 ⇒生誕後の母子一体による成長

けれども一方でこの母子一体の生存様式は、個体がやがて種を継続する主体として成長するための不可避の通過過程に過ぎず、この様式の固定化（自己目的化）はあり得ない

6、母子分離が不可避な根拠

・母乳と生殖の矛盾

母乳の分泌と次の生殖行為は矛盾の関係 1で述べたようにそもそも個の存在理由は種の継続でありそれは個体数が多い方が良いことは当然 「この子供のために母は存在しているのではない ⇒生理的な必然としての母子分離

・子は母乳なしの栄養摂取をどう行うか

母は生理的に生物学的に分離を指向する そうすると子は自らの生命を維持するための栄養をどこに求めるか 自力で獲得する以外は自らの死に直結 ⇒生存のための母子分離

・個の存在理由たる生殖をどう行う

母子一体での異性との生殖行為は不可能 ⇒生物の必然としての母子分離

※これらの条件は実は「ひきこもり」にも当てはまることに注意

7、母子分離の人間の歪曲

母乳は他の食物を母が提供することで未分離が可能となる
母は「次の生殖」を意志的に拒否することが可能 種の本質に矛盾することが可能
個体の性の欲求はマスターベーションで代替可能
以上のような歪曲（代替）によって種の本質から逸脱して未分離状態を続けることは可能

8、母子分離を如何に実行するか

母子分離を図る主体は飽くまで母及びその代理者でなければならない

<「独りでいる」という状態の強制的持続>

これは「個室に鍵をかけ閉じ込める」ことではない。他の利用者からの距離は不意の他害行為によって被害が生じないという判断によってそれぞれ異なる。当該利用者が興味を持ってそうなアイテムは出来るだけ手近に備えた上で（出来れば専用個室を用意）、「独りでいられるように見守る」のである。個室に閉じ込めるような放置とは違うのである。なぜ見守りが必要かと言えば、初めから彼が独りでいられる訳はないから。何時どんな時に「マンツーマンの対応」を求めて来るかを見極め、段階的に突き放し独りでいることを習得させるのである。無論この習得は困難でしばしばパニック的行動を伴う。これをどう解釈するかである。母子分離＝親離れ・乳離れとはそもそも子供の方が納得して成就されるものではない。子はあきらめるのである。諦念・断念もまた了解の一形式である。全ての動物もそうであり人間もまた例外ではあり得ない。この時見守りを行う支援者は母およびその代理者の役割を演ずるのである。

たとえば個室に閉じ込め、依存を断ち切って長期間放置した場合、母子分離は達成されるであろうか。このような処置によって母子分離が達成されるなら、従来入所施設等において行われて来た処遇は有意な効果を上げていなくてはならない →長期にわたる結果はどうであったか このような物理的隔離が有効であったなら、強度行動障害に対する治療法として確立していなければならない →当然のことながらそのような達成の事実はない

それは母子分離を図る主体が施設（施設の方針）であり、継続的に母及びその代理者が行った訳ではないから →隔離される当の本人は「母によって辛い母子分離が行われている」という関係性を実感することは出来ない →母子分離は「母子」という関係性の中で実存的な意味を持つのである

従って「施設運営の都合によって行われる隔離」は母子分離の支援とは似て非なるもの

9、まとめ

母子分離は以上のように人間であれ他の動物であれ、個体の成長に伴う不可避の現象

しかし人間の獲得した能力によって生物の原則から逸脱した未分離状態を継続延長することも可能
⇒これこそ「最も支援が難しい障害者」として我々が見ているもの

障害（とりわけ自閉障害）のある子を授かった母の孤立と子の将来への無分別が引き起こす、ある意味で已むを得ない母子の関係障害が「母子未分離」の原因

未分離ゆえ母（その代理者）との一体的存在様式から逃れられない⇒一対一対応

しかしこの根拠なき願望を満たすどのような支援制度も存在しない（母が死ぬまでこの様式に固執したとして、母亡きあとは誰が代行するか）

「仲間の中で過ごせる」ということが、障害がありながらも社会の中で生きて行く最小の条件
<どんなに障害が重くても、自らで乗り越えなくてはならない課題は存在する>

母子分離はあらゆる動物種が必ず通過する成長過程であり例外はない